

名の希望という僕たちは
列車に乗った (独・2018)



ベルリンの壁の建設がはじまるのは一九六一年のことである。それに先立つ五三年から、東ドイツ国民は西ベルリンに入る際には政府の許可を必要とされた。そして、この映画の題材となった事件は五六年に起こった。ポーランドと国境を接するスターリンシュタット（現アイゼンヒュッテンシュタット）に住む高校生二人が、一方の祖父の墓参りを口実に列車で西ベルリン

でも答えない生徒たちに教師は激高し、校長に事態を報告する。校長はさらに上に連絡し、その地域の日本でいえば教育委員会のトップが調査にやってくる。しかし、生徒たちは首謀者二人がだれか口を割らない。ついにはランゲ国民教育大臣までが学校を訪れる大事に発展する。スターリン死後の五三年に起こった東ベルリン暴動以来、「ウルプリーヒト政権は国民にたいする病的な疑念をいっそう深めていた」の

だ（ヒルトン 2007: 18）。

調査官は生徒たちを分断して追い詰め、校長は退学をほめかして吐かせようとする。この学校はエリート校で、卒業すれば東ドイツで輝かしい未来が約束されていた。これらが奏功してある生徒が二人の名を調査官に明かす。一人の生徒の父親は市議会議長という要職にあった。

へ向かう。花東を持参して車内の検問をパスした。二人は墓参りもそこそこに西ベルリンの映画館に潜り込む。そこで流されたニュース映像から、ハンガリー動乱で多くの市民が犠牲になっていることを知る。

学校に戻った彼らはこれに抗議するために、朝の始業時から二分間黙祷することをクラスメートに提案する。そして実行される。何を尋ね

翌日、調査官は議長を守るため、名を告げた生徒の父親が戦時中にナチの協力者だった過去を持ち出して、その生徒に罪をかぶせようとする。真実を知っている生徒たちはこの説明に納得せず、「私もです」「私も賛成しました」と次々に言い出して、教室は大混乱に陥る。教室は閉鎖となり、彼ら一九人は西ベルリン行きの列車に乗る。希望を託して。

高校生の二分間の行動に当局がここまであわてふためくとは。当時の東ドイツ政府が政権維持にいかにも自信がなかったかがわかる。

旧東ドイツに生まれて、二四歳でドイツ統一を迎えたフランク・リースナーはこう書いている。「東西を分断する占領地区間の境界線は、まるで東ドイツが血を流している大きな傷口のようだった。何もしなければ東ドイツは失血死しただろう。教育を受けた優秀な若者たちはさらに西側へ流出し、人口は劇的に減少したに違いない。（リースナー 2012: 62）。

本作品を観て、ようやくこの文章を具体的にイメージできるようになった。

ところで、一貫して沈痛な表情を浮かべる校長役は、映画『グッバイ、レーニン』（独・2003）で軽薄な青年を演じたフロリアン・ルカスである。好対照の配役に大笑いした。

参考文献…

- クリストファー・ヒルトン、鈴木主税訳（2007）『ベルリンの壁の物語 上』原書房。
- フランク・リースナー、清野智昭監修・生田幸子訳（2012）『私は東ドイツに生まれた』東洋書店。
- （二〇一九年五月二六日・Bankamuraル・シネマ）（にしかわ・しんいち／明治大学教授）